特集 リベラル・アーツ・アーカイヴス

II. Sciences

狂気の伝達—プラトン『イオン』篇における詩人と吟誦詩人、そして聴衆—

三浦 太一 ◉中部大学人文学部人間力創成総合教育センター講師

はじめに

私たちは藝術家に一体何を求めているのだろうか。私たちは藝術作品を受容し、評価し、何よりもまた、それによって、影響を受ける。影響力が強いほどに、関心は作品だけにとどまらず、その作り手へと触手を伸ばしていくだろう。そして、この作り手に対して、何か特別なものを求めてしまうことがある。例えば、より創造的な側面を強調して言えば、人間の合理的な制作能力だけでは説明できない、天賦の才による閃きを見出すだろう。他方、創作活動に見られる暗黒面に注目するならば、狂気や病、解消できない痛みといったものを、作者に求めようとする。いずれの形をとるにせよ、作者の健全な、あるいは、合理的な思考だけでは、作品が成立する原因として、何か不十分に思われることがある。

古代ギリシアの哲学者プラトンは西洋哲学の基礎を作った人物であり、そして、藝術哲学の根幹としても認められている。[1] しかしながら、プラトン作品における詩人に対する評価は、容易な一般化を許さない、複雑にして豊かな考察を含んでいる。例えば、『パイドロス』では、創作活動における狂気、ないし、神的霊感の必要性が述べられ、詩人達の持つ霊感が擁護されているようにも見える。[2] 他方で、古代ギリシア人にとって知恵の源泉でもあった詩人達に対する厳しい評価も、『国家』、『ソクラテスの弁明』といった作品に見いだされる。[3] 多くの人がホメロスに代表される詩人達について、高く評価し、強い信頼を持つのに対して、彼らは実際のところもっぱら模倣をする者であって、真実を語ることはなく（『国家』600e）、さらに、自分の作品が意味するところすらよくわかってはいない（『ソクラテスの弁明』22b–c）。

プラトン作品の中では比較的短い『イオン』という対話篇がある。上に挙げた著名な作品が扱っているような、詩人の霊感と無知といった問題を共有しながらも、『イオン』にはいくつかの興味深い特徴がある。

一　イオンという「吟誦詩人」が、主人公の役割を果たすソクラテスの対話相手となる。つまり、他の対話篇と異なり、詩に関わるが、詩人そのものではない職業人が問題の俎上に載せられる。

二　吟誦詩人は詩人が霊感によって受けた神からの声を聴衆に伝える役を果たす。

三　イオンも知識ではなく、「神的分け前」（テイア　モイラ）によってよい吟誦詩人なのだと言われる。

『イオン』の一般的な知名度は『国家』といった大作には劣るかもしれない。しかし、プラトンの他作品にとっても重要な藝術に関するテーマを扱っていると同時に、上に挙げたような特有の要素のために、『イオン』は研究者からは多大な関心を寄せられてきた。そして、このことから容易に想定されるように、『イオン』という作品の解釈、そして、評価の仕方は様々であり、意見の一致よりも、激しい議論の衝突がみられる。[4]

本稿が目指すのは、『イオン』が持つ特有の面白さを再確認し、一つの読み筋を示すことにある。長年にわたる研究者同士の解釈論争を網羅した上で決着をつけることが主眼に置かれることはない。むしろ、そのような論争の激しさが無理もないものとして、専門家以外のプラトン読者にとって現れるように、『イオン』が提出する問題の魅力を示すことが目標となる。本稿が提示しようとする「面白さ」とは、『イオン』が吟誦詩人という存在を仲立ちにして、詩人の狂気が聴衆にまで伝わってしまう危うさを生き生きと描き切っている点にある。藝術作品から多大なる影響を受けながら、藝術家とは何者かという問題を共有する読者にとって、プラトンが提示する藝術受容における「狂気の伝達」のありさまは、自身が受け取っているものに対する反省になり、藝術への見直しともなろう。その意味で、『イオン』は、藝術受容という体験に一度は浸りきった者が、その危うさを切実に捉えなおすための契機となるだろう。

第一節　吟誦詩人イオン

『イオン』篇は吟誦詩人イオンという人物そのものを読者に紹介するところから始まる。エフェソスの人イオンは、医神アスクレピオスの祭事において開催された吟誦詩人のコンテストで一等賞を勝ち取り、ソクラテスのいるアテネを訪れる。古代ギリシア語で吟誦詩人はラプソードス（ῥαψῳδός）と言い、ホメロスの作品を主とした、叙事詩の暗唱を専門とする。彼らは紀元前四世紀のギリシア世界では広く知られたものであり、シラクサ（今のシチリア島）の僭主ディオニシウスが、紀元前三八八年のオリンピア競技会に、四頭立ての馬車のチームを派遣した際、最高の吟誦詩人達を共に送ったことが伝わっている。[5]

ソクラテスはイオンを含んだ吟誦詩人達の「技術」（テクネー）に対する羨望を述べる。すなわち、彼らの技術には外見を見事に飾り立てるのがふさわしいとされていることが羨望の理由としてまず挙げられる（530b5–8）。[6] ただし、対話篇全体で本質的な問題となる羨望の理由は、外見に関わることではなく、吟唱詩人の行為と能力に見いだされている：

テキスト一

「また同時に、吟誦詩人の技術にとっては、他の多くの素晴らしい詩人たち、とりわけ、詩人達の中で最上にして、最も神的であるホメロス

に時間を費やすこと、そして、ホメロスの言葉だけではなく、彼の考えを学びつくすことが、必然なのである。これはうらやむべきことなのだ。というのも、もし、その詩人によって言われていることを理解していないならば、彼はよい吟誦詩人にはなりえないのだから。というのも、吟誦詩人は、聴衆たちにとって、詩人の考えの通訳者でなければならない。しかし、詩人が言っていることを理解していない者がそれを立派にすることはできない。それゆえ、そういったすべてのことは羨むに値するのだ。」（530b8–c6）

ソクラテスの羨望の対象となっている吟誦詩人の技術には言葉を正確に覚え、美しく発することだけでは十分ではない。決定的な点は、吟誦詩人は自分が朗誦しているものをよくわかっていなければならないということだ。彼らは聴衆たちにとって、詩人の考えの「通訳者」でなければならないからである。理解を欠いたものには、その任を果たすことができない。

ところで、この「通訳者」という言葉は何を意味しているのだろうか。上記のテキスト一で「通訳者」と訳した言葉は、ヘルメーネウス（ἑρμηνεύς）であり、意味を確定する上での議論がある。『イオン』の後の箇所における吟誦詩人の評価では、彼らは正気を失って、神が語ることをただ伝達する者でしかない（534e–535a）。ここでも、同じくヘルメーネウスという語が用いられているにもかかわらず、その意味には解釈や理解の要素は含まれない。むしろ、霊感に取りつかれながら、それを聴衆に伝えるという意味が見いだされる。すなわち、『イオン』という対話篇内部で、吟誦詩人を表すヘルメーネウスという言葉の意味に揺らぎがあるように見られるのである。Capuccinoは多くの研究者がヘルメーネウスをテキストの注釈や解釈という意味をこめた“interpreter”（通訳者）の意味で理解していることに反対し、二つの箇所における言葉の意味の一貫性、そして、吟誦詩人の仕事についての理解の一貫性を保つため、テキスト一におけるヘルメーネウスの意味も伝達者として取る。[7] 彼女によれば、吟誦詩人に求められる知は、例えば、ホメロスが語っていることが正確にして、真であるかに関わり、何を言っているかを解釈することではない。[8] それに対して、MurrayやRijksbaronは『イオン』冒頭と後の箇所ではヘルメーネウスに意味の変化があると理解し、このテキスト一では、吟誦詩人の側での知識を示唆する、通訳者（interpreter）の意味を、後の箇所では、単に仲介者であることを意味する、代弁者（mouthpiece）の意味を読み込む。[9]

実際に後の箇所のテキストを見る前に、ここでヘルメーネウスのとらえ方に対する見通しを述べておく。このテキスト一では、「学びつくす」、「言われていることを理解する」といった、吟誦詩人における「解り」が強調されていることは明らかである。しかし、また同時に、「聴衆たちにとって」という要素も付け加わっている。つまり、単独でホメロスを解釈しているだけではなく、聴衆という聞き手が当然想定されている。聴衆たちのために、詩人の考えを理解し、通訳する者が吟誦詩人となる。ゆえにここで言われているヘルメーネウスには理解し、伝えるという二つの働きが想定されていると思われる。ただし、テキスト一と後に見る

みうら　たいち◎上智大学哲学科卒業、ならびに、同大学院博士前期課程修了。ロンドン大学キングスカレッジ哲学科、博士課程修了。哲学博士（PhD in Philosophy）。専攻は古代ギリシア哲学。現在の研究テーマは、プラトン哲学における自己知。主要論文に、"Immortality and Imperishability of the Soul in the Final argument of Plato's *Phaedo*" (in *Plato's Phaedo. Selected Papers from Eleventh Symposium Platonicum*, 2018) がある。

534e-535a の間での、文脈と強調点の違いにも注意しなければならない。テキスト一ではソクラテスは彼が羨望するような形での吟誦詩人を語り、そして、そのような者たちが「ヘルメーネウス」でなければならない。いわば、規範的に（あるいは理想的には）、そうであるべき吟誦詩人の有様を述べている。他方、後の箇所では、イオンを含めた吟誦詩人達の実際の状態について語っており、言及する対象が変更されている。[10] テキスト一でソクラテスが示唆しているのは、伝えるためにまず、その考えを徹底的に理解しなければならないということであろう。それは、吟誦詩人がホメロスに時間を費やしていることが、ソクラテスの羨望対象になっていることからも推測できる。また、Capuccino は吟誦詩人に求められるものは、ホメロスの言っていることの真偽を判定することであり、何を言っているか解釈することではないと主張しているが、ホメロスの考えを理解することなく、それは可能なのだろうか。[11] ソクラテスも、例えば『プロタゴラス』篇でプロタゴラスの「徳を教える」という主張に対して、徳は教示不可能ではないかという疑問を持つ。しかし、まずプロタゴラスに対して彼の主張を明らかに示すよう求めるのである（『プロタゴラス』319a–320c）。したがって、テキスト一では吟誦詩人＝ヘルメーネウスの「言われていることを理解する」という規範的に持つべき特徴が前面にでている。他方、後半部では、そのような理解を一切持たない詩人と、吟誦詩人の狂乱の、実際上の姿が表わされ、伝達者としての身分だけが認められる。この文脈の違いから、一つの語に込められている複数の意味の中での強調点の差が出てくる。そのため、本稿では Murray や Rijksbaron の主張に従い、テキスト一では理解の意味を強く提示する「通訳者」、後半では「伝達者」をヘルメーネウスの訳語として用いる。

イオンはソクラテスの羨望表明に対して、我が意を得たとばかりに返答する。吟誦詩人の技術の中でも「その点」が最も彼の苦労したことであり、また既存の吟誦詩人達のだれも彼自身ほどには「ホメロスに関する、多くのそして美しい考えを語ること」はできない（530c7–d3）。さらに、彼が続けてひけらかすのは、彼が「どれほど上手にホメロスを飾りたててきたか」ということなのである（530d6–7）。この一連の返答では、イオンの関心は、彼自身が多くの、そして、美しいことをホメロスについて語ることができるという点に向けられている。言い換えれば、彼のこだわりは自分自身の能力と、語られることの美しさにあり、ソクラテスが強調する「理解」という要素は彼の言葉からは抜け落ちているように見える。

吟誦詩人が持つべき能力に関して、ソクラテスとイオンの間で、それぞれ「理解」と「美しさ」を求める二つの異なる把握が見いだされる。この差異に関連して、中澤は吟誦詩人の能力に関して、「審美的」な側面（例えば、聴衆に上手く語り、様々な感情を引き起こすこと）と「知的」な側面（詩人の考えを理解し、それを聴衆に伝えること）という二つがあることを捉えている。[12] ただし、多くの研究者がこの二つの側面は相互に排他的なものとして考えているのに対して、中澤は二つの側面は分断不可能だと考える。うまく吟誦するということの基盤には、必ず知的な側面が必要とされる。本稿は、この知的な側面なくしては、うまく語るということはそもそもありえないという、中澤の考察に同意する。中澤の論点で重要なのは、『イオン』が問題としているのは、詩人も吟誦詩人も、何かを「語る」主体としての身分を認められていないというところにある。[13] 本稿も、この伝達全体に問題がある論点に同意し、特に第三節において、吟誦詩人は語り手としての主体性が奪われ、狂気の連

鎖の伝達者でしかないことを確認する。ただし、本稿がさらに追加する点として、聴衆という存在が連鎖に加わっている重要性を併せて指摘する。そして、聴衆は一体どうあるべきかという論点を第五節で提示する。

さて、ソクラテスはイオンのもう一つの奇妙な状態を暴露する。彼はイオンがホメロスについてのみ巧みなのか、それとも、他の高名な詩人ヘシオドスやアルキロコスについても巧みなのかと問う（531a1–2）。それに対し、イオンははっきりと「ヘシオドスやアルキロコスについてはまったくそうではなく、ホメロスについてだけなのです。というのも、私にはそれで十分だと思えますから。」（531a3–4）と答える。ここでイオンは吟誦詩人としても非常に奇妙な特質を示している。ヘシオドスもアルキロコスも同じく言葉による作品を作っているにも関わらず、彼が上手く彼の仕事をできるのはホメロスについてだけなのだ。彼のありかたには何か欠落したものがある。ではなぜこのようなことが生じているのだろうか。

第二節　吟誦詩人の仕事

イオンの奇妙な状態を踏まえて、ホメロスやほかの詩人達が語っている内容に問題が移っていく。ホメロスも他の詩人達も同じ事柄について語っていることがあると、ソクラテスとイオンの間で認められる。例えば、戦争について、善人と悪人、素人と専門家の間での関係、人間と神々がどのように関わるか、天空と冥界の諸状態といったことである（531c–d）。ただし、イオンの評価に従えば、ホメロスが最も上手くそれらについて語っており、語り方に質の差があることが想定されている。

ソクラテスがさらに問うのは、よく語っているものと悪く語っているものを判定することができるのは、同じ者なのか、あるいは異なるのか、ということである。例えば、健康な食べ物についてどのようなものなのか語られている場合、それを上手く語っている者と下手に語っている者について分かる者は、同じ人物なのか、それとも、異なる人物なのだろうか。イオンは同じ人物であり、その人物は「医者」という名を持つと答える（531e8–9）。ここでソクラテスが言っている「よい／わるい」の区別には情報の正確さという観点がいつの間にか入り込んでいることに注意しなければならない。医者は身体に善いものと悪いものに対する具体的な知識を持ち、そして、知識の正確さを問われる技術者であるが、それが美しく語られているかを判定するものではない。そして、このことが以下の形で一般化される。

テキスト二

「では、要約して我々が言うと、同じ事柄について多くの人が語っている場合、誰が良く語っているか、そして、誰が悪く語っているか、同じ人が見分けるだろう。あるいは、もし、悪く語っている人を見分けられないであろうなら、よく語っている人も見分けられないだろう、少なくとも同じことについて語っているならば。」（531e9–532a3）

同じ内容が語られている限りは、良く語っている人と悪く語っている人を、同じ人が判定できなくてはならない。そのため、イオンのホメロスについてしか巧みではないという特性は正当化されないことになる。ホメロスがよく語っていることも、他の詩人達が悪く語っていることも、イオンはきちんと判定しなければならない。

イオンはここで自分自身の奇妙な状態について当惑することになる（532b8–c4）。他の人がホメロス以外の詩人について語る際には、彼は注意を向けることができず、居眠りしてしまい、何を言うべきかもわからない。他方、ホメロスについて語られるときには、起き上がって、注意を向け、言うことには困らない。この原因が彼には分らないのだ。興味深いことに、この奇妙な状態の原因について、ソクラテスの方から一つの推測を与える。イオン自身について、他者であるソクラテスのほうが見通しを持っていることがあるのだ。

テキスト三

「そのことを推測するのは難しいことではないのだ、友よ。むしろ、君がホメロスについて技術や、知識によって語ることができないということが、まったくもって明らかなのだ。というのも、もし、君が技術によって語ることができるのであれば、ほかのあらゆる詩人についても語ることができるだろう。というのも、詩作の術とは全体に関わるものだから。そうではないかね。」（532c5–9）

医者が健康によい食べ物と、悪い食べ物の両方を判定できたように、何らかの技術を持つものは、全体を扱うことができなくてはならない。もし、詩が技術によって作られているならば、吟誦詩人はその技術によって判定しなければならないだろう。[14] そして、技術である以上は、全体的なものであり、イオンのようにホメロスについてだけ語るに巧みであるということはあってはならない。このことは画家や彫刻家、さらに、イオンを含む吟誦詩人の例を用いて具体的に説明される（532e5–533c3）。ポリュグノトスという画家については彼の善い作品と悪い作品を判定できるのに、他の画家についてはそれができないという人は見られない。さらに、彫刻家や、吟誦詩人の場合でも、ある特定の人の作品を解釈することはできるのに、他の人に関してはできない者を見ることもない。このことから、イオンは、少なくとも、医者や彫刻家といった技術者とは違った状態にある。

第三節　霊感・狂気の伝達

イオンはホメロスについて、何によってよく語っているのだろうか。イオンの言い分を信じるならば、彼は見事にホメロスを語ることができるし、また、他の人たちもそれを認めている。ソクラテスはそれが実は技術ではなくイオンを動かす「神的な能力」（533d3）なのだと言う。さらに、吟誦詩人がその詩を語る詩人達も、技術によって詩作をしているわけではないと示す為に、ソクラテスは「マグネシア」あるいは「ヘラクレア」の石と呼ばれる、今日我々にもなじみのある磁石（マグネット）の例を持ち出す（533d3–4）。この石は、指輪のような金属性の物体を引き付ける力を持つが、この引き付けている物体にも他の物体を引き付ける力を与える。その力によって、お互いが結びついた長い鎖ができあがってしまう。同様のことが、美の女神であるムーサと人間たちの間でも起こる。

テキスト四

「同様に、ムーサも、一方ではご自身で神がかりの者どもを作り出し、他方で、彼ら神がかりの人々を通じて、他の神がかりにされた人々の鎖

がつながってできてくる。というのも、あらゆる優れた叙事詩の作者は、技術からではなく、むしろ、神がかりにあり、とりつかれているときに、そういったあらゆる美しい詩を語るからだ…」（533e3–5）

実際の磁石の例で考えると、その磁力の源が引き付けられている側の金属にあると、私たちは思わないだろう。元の磁石がなければ、その他の金属は引き付ける力を持ちえないからだ。文藝の女神であるムーサは叙事詩人達に磁力のごとき神がかりの力を与える源となり、詩人はそれによって美しい詩を語ることができる。

また、詩人達はムーサの果樹園から蜜を摘み取り、聞き手へと運んでくるミツバチのようなものだとも語られる（534a7–b3）。このミツバチが軽やかに飛翔し、蜜を運ぶ為には一つの条件がある。すなわち、彼らは正気を失う必要がある。

テキスト五

「…そして、神がかりになり、正気を失い、理性がもはや彼の中からなくなってしまう前には、詩を作ることはできない。そんなものを持っている限りは、あらゆる人間は詩を作ることもできないし、神託を運ぶこともできない。」（534b4–7）

すなわち詩人達にとって理性（ヌース）とは美しい詩を作るにあたって、単に役立たずだというだけでなく、なくなってしまう必要がある。だからこそ、技術という人間の理性的な知に属するものによっては決して詩は作られない。結局のところ詩人達は「神的な分け前」（テイアモイラ）[15]によって、ムーサがそこへと引寄せたものだけを上手く作ることができる（534b7–c5）。このことを示す証として、それぞれの詩人達が、詩にある様々な種類の内、一つだけを善く作ることができる一方で、他のものに関しては下手であることが挙げられている。もし、彼らが技術によって作っているのならば、技術とは全体的なものであることが認められていた為（テキスト三参照）、ある一つだけが上手ということはありえない。

以上のことから、詩人達は技術者としての身分を持ちえないと同時に、また、詩の語り手としての身分すら認められない。磁石に引き付けられた指輪が、また別の指輪を引き付けたとしても、その引力の主体としては認められないように、神がかりによって聴衆を引き付ける詩を作る詩人は、その詩の真の語り手ではない。神こそが真の語り手であると、ソクラテスは以下のように述べている。

テキスト六

「そういったことから、神は彼らから理性を奪って、彼らを従者として、神託を伝えるものや神的な予言者として用いる。その為、私たち聞き手は次のことが分かる。そのような多くの価値があることどもを語っているのは、理性をもたない彼らではなく、むしろ、神ご自身が語り手であり、彼らを通じて私たちに話しているということを。」（534c7–d4）

ここで特に、詩人達が伝達者であるということが強調されることになる。語られていることの本当の語り手は神であり、加えて、聞き手がそれを分かるようになっている。つまり、ここでのソクラテスの発言を文字通りにとるならば、詩人達が語っていることの内容の由来を彼らに帰してはならない。詩人達は結局のところ、それぞれに決まった神に取り

つかれた、理性を持たない「伝達者」（ヘルメーネウス）以外の何ものでもないことになる。[16] 特にその証拠として、叙情詩の名作を作ったテュンニコスが挙げられている。彼は、叙情詩以外の詩に関しては全くの凡庸な詩人であり、自身の作品を端的に「ムーサの発明」と語っている（534d4–e1）。

さて、詩人とは「神的分け前」によって神が語ることを聞き手に伝えるものであることが同意された後、今度はイオンを含めた吟誦詩人の身分が確認される。すなわち、吟誦詩人とは神々の伝達者である詩人達の詩を吟誦する以上、「伝達者達の伝達者」ということになる（535a9）。さらに、吟誦詩人も、さらに、その聴衆も、決して正気の状態ではないことが認められる。イオン自身は例えば、ホメロスの作品の中で、憐れみや恐れをそそる箇所を朗誦するときには（例えば、アキレウスがヘクトルに襲い掛かる場面や、破滅へと向かうトロイアの王プリアモスを描く場面で）、「目は涙で満ち」、「髪の毛は逆立ち、心臓が跳ねあがる」（535c5–7）。悲しみや恐怖に満ちた場に直に居合わせているのではなく、祭りの場で黄金の冠をかぶり、乱暴を振るうことのない聴衆の前にいるにもかかわらず、憐れみと恐怖の感情に襲われている吟誦詩人は、もはや正気ではない（535d1–7）。さらに同様の狂気が聴衆の側にも伝わっていることを、イオン自身も気づいている。

テキスト七

ソクラテス「それならば、君は知っているだろうか、聴衆の中の多くの人たちにも、そういった同じことどもを、君たちは引き起こしているということを。」

イオン「はい、私は実際よく知っています。というのも、私はいつも演台の上から、彼らが泣き叫び、恐ろしそうな表情をし、語られている言葉によって感動しているのを、見ているのですから。」（535d8–e3）

神がかりの詩人の狂気は吟誦詩人や聴衆にまで及ぶ。詩人とは、ムーサによって力を与えられたお互いに引き付けあうつながりの中で、ムーサにつながる最初の者であり、吟誦詩人は中間者であり、そして、聴衆がその末端にあると述べられる（535e7–536a1）。詩人達は特定のムーサに、さらに、吟誦詩人達は特定の詩人達から捉えられており、神がかりの状態にある（536a7–b4）。それゆえ、詩人は特定の種類の詩（叙事詩や叙情詩、賛歌や舞踊歌）にのみ巧みであって、他に関してはそうではない。さらに、イオンを含めた多くの吟誦詩人達は、ホメロスによって捉えられている。それゆえに、ホメロスについてのみ語ることができるのであって、他の詩人達に関しては、注意を向けることも、起きていることも、それについて何かを語ることすら難渋する。これは吟誦詩人が知識ではなく、むしろ、神的分け前と、取りつかれていることによって、語っているためなのだ（536c1–2）。酒神バッカス（あるいはディオニソス）の信徒、正気を失いながら踊り狂うコリュバンテスが信仰する神に関わる音楽しか聞こえないように（536c2–4）、神がかりにあるものは、それへと結びつけられているものにしか、能力を発揮することできない。イオンは技術ではなく、神的分け前によって、ホメロスの賞賛者（エパイネテース）であると、ソクラテスは言う（536d1–3）。

一連のマグネシアの石に関連するテキストで注目すべきことは、それが詩人と吟誦詩人における主体性の欠落を描いているだけでなく、聴衆もその狂気の連鎖の末端で同じ影響を受けていることを明らかにしている点にある。イオン自身が目にした通り、吟誦詩人のパフォーマンスを

聴く者もまた、安全な上演会場にいながらにして、ホメロスの詩の様々な場面から恐怖や憐れみにおそわれている。そして、伝達された狂気に取りつかれるならば、強い影響を与える吟誦詩人を聴衆が重く見ることは容易に想像できよう。実際、冒頭でイオンは自分がコンテストで一等賞を受けたことを誇り、また、ソクラテスは吟誦詩人が煌びやかな衣装を当然のものとして許されていることを指摘する。しかし、いかにその伝えられる影響が強いにしても、決して、その原因を吟誦詩人や、さらに、彼らがその作品を歌う詩人に帰してはならない。あくまで、神のみが語りの主体であり、他のものはその伝達を行う鎖の部分でしかない。[17]

第四節　イオンができることは何か

マグネシアの石の議論を通じて、詩人と吟誦詩人の主体性が剥奪され、代わりに、狂気の伝達者としての身分が与えられた。それに対して、イオンは自分が狂気によってホメロスを讃えていることには納得しない。それゆえ、ソクラテスに対して、実際にホメロス作品を朗誦して、自分の能力を示そうとする（536d4–7）。それに対してソクラテスが問題とするのは、ホメロスが語っていることの中で、イオンは何についてよく語っているのか、ということである。イオンは全てだと答えるが、この応答はソクラテスの意図を理解していない。第二節で、健康に良い物と悪い物についてよく語っているかどうか判定できる者は医者であったように、一つの事柄に対してはそれに対応する一つの技術がある。他方で、詩人ホメロスは作品中で様々なことを語っている。イオンにホメロス作品を朗誦させつつ挙げられているのは、馬車競争、釣りに使う錘、負傷した戦士が飲むカクテル、予言者が語る禍の言葉、鳥と蛇の行動からの吉兆占い、といったように多岐にわたる（537a–539d）。こういった事柄についてホメロスが見事に語っているかどうかを判定することは、それぞれ御者、釣り師、医者、予言者といった者たちにふさわしい。

それぞれの技術に対して、扱うべき対象が特定されているのならば、吟誦詩人たるイオンは一体何を判定できるのだろうか。イオンはここでなおも、すべてのことがらについてなのだと主張する（539e6）。もちろん、ソクラテスが即座に反論するように、それぞれの技術が割り当てられた特定の対象のみを扱うことができるならば、吟誦詩人には全てを判定するような能力は認められない。イオンは、吟誦詩人は、言及された御者や、医者、予言者が扱うようなこと以外の全て、すなわち、「男が言うのに相応しいことは何か、また、どのようなことを、女や奴隷や自由人が語り、そして、どのようなことを支配する者と支配される者が語るにふさわしいか」を知っていると主張する（540b3–5）。恐らく、イオンが考えているのは、ホメロスに登場する様々な登場人物がどのようなことを、いかに言うべきなのかについて知っている、ということであろう。[18] しかし結局のところ、「海で嵐にあった船の操縦をする者」、「病人を指導する者」、「暴れ牛を鎮める牛飼い」、「羊毛を紡ぐ女性」が語るにふさわしいことは、吟誦詩人がそれぞれの専門家よりよく知っているということはない（540b–c）。ところが、ソクラテスが最後に挙げた「将軍が語るに相応しいこと」については、イオンは知っていると宣言し、それだけでなく、自分が優れた吟誦詩人であり、ホメロスを学ぶことによって、実際に優れた将軍でもあることを認める（541b4–5）。

イオンの自己主張はこの段階で荒唐無稽に聞こえる地点にまで至っている。実際、将軍という最も実務経験と結果を必要とする職に関して、

ホメロスの作品から学んだことによって優れた者になっているという主張はあまりに奇妙であり、ソクラテスからも、それならばどうして実際にイオンが将軍として選ばれていないのかと疑問を呈される（541b–c）。イオンの信じがたい主張を一旦置いたとしても、議論の本筋としてより深刻な問題は、吟誦詩人が専ら知っていることについて、イオンがいっこうに示すことができないという点にある。それゆえ、ソクラテスに次の二つのどちらかを認めることをイオンは迫られることになる（542a3–7）：

一　イオンは、何らかの技術をもったうえでホメロスを上手く語っているのに、それを示さないならば、不正である。

二　イオンは、神的な分け前によって、ホメロスにとりつかれ、多くの美しいことを語っているのならば、不正をなしているのではなく、神的である。

イオンは自分が神的であることを選び、最後にソクラテスによるイオンの定義により、この対話篇は結ばれる。

「君は、ホメロスの賛美者であることに関して、神的な者であって、技術者では決してないのだ。」（542b3–4）

イオンは何らかの特定のことを知っている技術者としての身分は認められず、狂気にとりつかれた神的なものと規定される。「神的」という表現とは裏腹に、読者に現れるイオンの姿はむしろ奇妙なものになろう。マグネシアの石で示されたように、吟誦詩人とは語ることの主体性を奪われ、狂気に取りつかれた伝達者にしか過ぎない。そして、『イオン』最終部分において、イオンは自分が実践をしたこともなく、選ばれたことすらない、将軍としての資質を持っていると言い出す。対話篇全体として、自己の状態への把握を欠いた、イオンの愚かな姿が浮かび上がってしまったと言わざるを得ない。

しかしながら、イオンが示している愚かさが彼固有のものであると、私たちは言うことができるだろうか。すでにイオン自身が、彼自身の朗誦によって、聴衆の感情が狂乱をきたしていることに気づいていた。聴衆もまた彼らの狂気を受け取る者であり、詩人や、吟誦詩人が知識を持たずそれをもたらしているならば、聴衆の側も全くの無知のまま、ただ作品がもたらす感情的影響を受け取っているに過ぎない。ホメロスの詩や、ヘシオドスの詩、他のいかなる詩人のものであっても、それをただ読み、聴くだけで、何かを知った気になっているならば、イオンと同じ愚かさを持つことになる。たとえ、神が詩人達を通じて語った内容が善きものであっても、自らの正気や理性を保つことがないならば、狂気の受取手に過ぎないであろう。加えて、本来は何らの主体性も持たない詩人や吟誦詩人の力をほめそやすとしたら、彼らの自己に対する無理解を補強する共犯者にもなりかねないのだ。

第五節　ソクラテスと神託、そして、狂気

詩作品を受容することは、神から語られることであり、神がかりの人と相対することでもある。イオンは自らの愚かさを示し、そして、聴衆もそれと同様の愚かさに陥る危険から免れてはいない。では、いったい聴衆とはどうあるべきなのだろう。『イオン』ではイオンの愚かさを通

じた、危険への示唆を読み取ることはできるが、その対策に関しては明らかではない。

しかしながら、私たちは、他のプラトン対話篇を通じて、神託や神がかりに対してどのように対応するべきかを、ソクラテスの姿によって教えられている。『ソクラテスの弁明』で彼は、何事にも熱狂しがちな友人カイレポンを通じて、ソクラテスよりも知恵のある者はだれもいないという「デルポイの神託」を受け取っている（21a）。ソクラテスはこれに対して、自分が知恵のある者では決してないことを自覚している一方で、神が嘘をつくはずはないとも考えた。彼は思い悩んだうえで、自分よりも知恵のあるものを発見して、神託を反駁することを試みた。しかし、知者であると自他共に認める、政治家、詩人、職人の誰もが、決して善美の事柄を知らないにも関わらず、それを知っていると思い込んでいたことが暴露される。他方、ソクラテスは、そういったことについては知らず、そして、そのとおり知らないと思っているがゆえに、彼らよりも知恵があるのだ（21d4–8）。したがって、この暴露と、自分自身の状態を自覚することで、ソクラテスは神託を補強したことになる。この問題は藝術という範疇からは外れているようにも見える。だが、テキスト六（『イオン』534c7–d4）において、詩人は神のメッセージを伝える予言者と同一視されていたことを思い出さなくてはならない。藝術も予言も、共に神が語ることを受け取るという要素がある。そして、ソクラテスはデルポイの神託を疑問に思い、それを吟味し、真の意味を理解するという形で、神が語ることを受け止めるのである。

また、『パイドン』では、ソクラテスは夢によってメッセージを受け取っている。アテネの裁判で死刑の判決を受け、人生の最後の日々を牢獄で過ごす彼に、同じことを語る夢が何度も訪れる。それは、「ソクラテス、ムゥサイの術（わざ）をなし、それを仕事とせよ」というものだった（60e6–7）。[19] 彼は、最初の内、哲学こそが最高のムゥサイの術であると考え、夢は彼のしていることへの励ましと受け取った。しかし、夢が命じているのは、より一般的なムゥサイの術を言っているのかもしれないと考えたことから、ソクラテスは、以前は決してしなかった、詩作を始める。彼は神への賛歌を作り、次にアイソーポス（イソップ）の物語を詩に仕立てあげた（61b）。この箇所でも、彼は夢の知らせの意味を解釈、吟味し、彼がなすべきと考えたことを実行している。

神がかりの狂気を肯定する『パイドロス』篇でも、ソクラテスの狂気や神がかりへの態度は自己吟味の契機を含んでいる。[20] この対話篇では、ソクラテスはエロース神への賛歌を歌い、それは狂気や恋に対する賞賛にもなっている。予言者は神々から与えられた狂気によって正しい道を示し（244b–c）、また詩人達は、『イオン』と同様、ムゥサによる狂気（マニアー）によってよき詩を作る（245a）。そして、かつて見た真実の美を求めながら、この世で人物に美を見出し、恋をする。この世では到達できない上方の美を眺め、下界のことをなおざりにすることが狂気と呼ばれる（249d–e）。恋の狂気が考察され、その理由が説明される時、ただ盲目的に情熱や、狂乱に陥ることが肯定されているわけではない。恋をする人間の魂は素性のよい馬と、悪い馬、そして御者からなる二頭立ての馬車の比喩で説明される（253c–254e）。悪い馬は、美しい人を見ると、ひたすらに突き進むのだが、御者は真の美の記憶を呼び起こし、畏敬と恐れから手綱を強くひく。御者の制御によって、よい馬はさからわず、悪い馬はもがきながら、二頭ともしりもちをつく。悪い馬も最後には、御者の制御に従い、慎みと恐れに満たされることになる。『パイドロス』では恋の狂気が肯定され、そして、そこには恐れが残ってはい

るものの、その仕組みが説明される時には、思惟を司る御者が働いているのである。

以上の神がかりや、狂気、神託の受容を見ると、ソクラテスの態度はマグネシアの石で表された狂気の伝達の構造にはあてはまらない。詩人や、吟誦詩人、そして、バッカスの信徒コリュバンテスも、自分たちが結びつけられたものの声をただ受け取るものであるがゆえに、考察し、疑問に思い、吟味する機会と能力を奪われている。ただし、ソクラテスが神託や、神がかり、狂気を真剣に取り扱っていることにも留意しなければならない。彼は神託や夢のお告げを非合理なものとして最初から排除するのではなく、検討対象として、おのれの考え、言葉によって理解しようとするのだ。[21]

結語

『イオン』は私たちが藝術作品とその作者に求めてしまう、何か特別なものの由来を説明すると同時に、冷徹な分析をも提示する。詩人は霊感に取りつかれ、吟誦詩人はそれを伝え、聴衆は多大なる影響を受ける。私たちは、詩人にも、吟誦詩人にもなりうる可能性があるが、多くの場合聴衆として狂気の伝達の鎖の中にある。ただ、この中の誰になったとしても、私たちは神が与える声をただ受け取るものでしかなく、そこから知は奪われている。伝わっているものの意味を本当に知っているものは、神であり、ムーサ達であるにもかかわらず、聴衆は正気を欠いたまま藝術作品に慄きを感じ、それをもたらす者たちの能力を、誤って高く評価する危うさがある。それに対して、ソクラテスは、神からのメッセージに対して異なる態度をとる。神秘なものを排除するのでも、そのまま受け入れるのでもなく、疑問に思い、考え抜き、そして、吟味にかける。藝術が何か神的なものから発するものであると認めるならば、この態度は詩という藝術作品にも適用すべきものであろう。『イオン』を含めたプラトン作品の中に、ソクラテスとイオンの対比を見出す時、私たちは藝術に関して一つの選択を迫られることになる。ただ狂気の伝達の中にいることを歓び生き続けるのか、それとも、藝術家に被せられた虚飾をはぎ取り、語られていることの真の意味を考え抜くべきなのだろうか。[22]

テキスト

Plato, *Platonis Opera*, tomus II–III, edited by John Burnet. Oxford Classical Texts. Oxford: Oxford University Press, 1901-1903

Plato, *Platonis Opera*, tomus I, edited by Duke, Hicken, Nicoll, Robinson and Strachan. Oxford Classical Texts. Oxford: Oxford University Press, 1995

Plato, *Platonis Rempvblicam*. S.R.S Slings recognovit breviqve adnotatione critica instrvxit. Oxonii. E Typographeo Clarendoniano, 2003

翻訳、注釈書

(日本語)

藤沢令夫訳「パイドロス」『プラトン全集』第五巻、岩波書店、一九七四年

藤沢令夫訳「プロタゴラス」『プラトン全集』第八巻、岩波書店、一九七五年

田中美知太郎訳「ソクラテスの弁明」『プラトン全集』第一巻、岩波書店、一九七五年

松永雄二訳「パイドン」『プラトン全集』第一巻、岩波書店、一九七五年

森進一訳「イオン」『プラトン全集』第十巻、岩波書店、一九七五年

藤沢令夫訳『国家』全二巻、岩波文庫、一九七九年

(欧語)

Plato, *Plato's Ion*, edited by A.M. Miller, Bryn Mawr Commentaries, 1981

Plato, *Two Comic Dialogues*. Ion *and* Hippias Major, translated by P. Woodruff, Indianapolis: Hackett, 1983

Plato, *Plato on Poetry*. *Ion; Republic 376e-398b9; Republic 595-608b10*, edited by P.

関連書籍、論文

(日本語)

中澤務（2001）「プラトンはなぜ詩人を批判したか（1）：ソクラテスと吟誦詩人」、北海道大学文学研究科紀要、105、1–19

荻野弘之（1989）「詩人の場所―『国家』第十巻の「詩人追放論」（一）―」『東京女子大学紀要論集』第三十九巻、第二号、1–20

ドニ・ユイスマン（1992）（吉岡健二郎、笹谷純雄訳）『美学』、白水社

(欧語)

Capuccino, C. 2011. "Plato's Ion and the Ethics of Praise" in *Plato and the Poets* edited by P. Destrée and F.G. Herrmann, *Mnemosyne Supplements*, vol. 328, Leiden/Boston: Brill: 63–92.

Gonzalez, F.J. 2011. "The Hermeneutics of Madness: Poet and Philosopher in Plato's *Ion* and *Phaedrus*" in Destrée and Hermann:92–110

Janaway, C.1992. "Craft and Fineness in Plato's *Ion*." *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 10: 1–23.

Kahn, C.H. 1993. "Plato's *Ion* and the Problem of *Techne*" in *Nomodeiktes: Greek studies in honor of Martin Ostwald* edited by R. M. Rosen and J. Farrell, The University of Michigan Press:369–378.

Stern-Gillet, S. 2004. "On (mis)interpreting Plato's Ion." *Phronesis* 69:169-201

Woolf, R. 1997. "The Self in Plato's Ion." *Apeiron* 30: 189–210.

Murray, Cambridge: Cambridge University Press, 1996

Plato, *ION: or on the ILIAD*, edited with introduction and commentary by A. Rijksbaron, Leiden/Boston: Brill, 2007

Platon, *Ion*, traduction inédite, introduction et notes par Monique Canto, Paris : Flammarion, 2001

注

（1）ドニ・ユイスマンは以下のように述べる：「『哲学原理』の著者デカルトがその有名な序文で哲学の木を描いたように、芸術哲学の木を描かねばならないとしたら、その根には美学全体の根源として、プラトン哲学を置くことになるだろう。」（ユイスマン1992, 12）。

（2）「けれども、もしひとが、技巧だけで立派な詩人になれるものと信じて、ムゥサの神々の授ける狂気にあずかることなしに、詩作の門に至るならば、その人は、自分が不完全な詩人に終わるばかりでなく、正気のなせる彼の詩も、狂気の人々の詩の前には、光をうしなって消え去ってしまうのだ。」（『パイドロス』245a5-8、引用は藤沢令夫訳から。文献表参照）。

（3）『ソクラテスの弁明』22b-c、『国家』第十巻、595a-607a

（4）『イオン』の攻撃対象の特定が専門家の間では課題となっている。例えば、他の対話篇と合わせて、ホメロスに代表される詩人や詩そのものが批判対象だとする解釈がある（Woodruff 1983, 10）。詩人が持つ霊的インスピレーションの擁護を見る意見もあるが（Janaway 1992）、このような擁護や、霊感を重視するロマン主義的な解釈を『イオン』に持ち込むことへの徹底的な批判も見られる（Stern-Gillet 2004）。また、知識あるいは技術と、それに対する霊感という対立軸を明らかにした上で、詩に肯定的な評価を与えつつ、しかし、プラトンが後にその概念を展開・利用する「技術」（テクネー）との峻別を強調する解釈がある（Kahn 1993）。対話篇としての文脈の展開を重くみつつ、吟誦詩人を批判の直接の対象とする研究者もいる（Capuccino 2011）。さらに、「語る」ということがいかに成立するかという問題を重視し、吟誦詩人を語る者として議論の対象にしたという考察がある（中澤　2001）。この場合には、知識の教師を自称する「ソフィスト」や「詩人」達も語ることを仕事とする者として、同じ問題意識で取り上げられることになる。

（5）Murray 1996, 20.

（6）『イオン』ギリシア語テキストは John Burnet 校訂 Oxford Classical Texts の *Platonis Opera*, vol. III による（文献表を参照）。訳文には森進一訳「イオン」を参考にしながら、筆者の訳を用いた。

（7）Capuccino 2011, 68-70.　彼女も伝達を行う前に、理解するという段階があることを認めている。ただし強調点は、理解することと、伝達することは切り離された段階であることにある（ibid., 68）。つまり、吟誦詩人はまず理解し、そして、伝達する。それ故に、このヘルメーネウスという語は、二番目の段階の伝達者の意味を取るのだと思われる。

（8）Capuccino 2011, 69. また、『イオン』531d–532b でこの議論がみられる。

（9）Murray 1996, 102、また、Rijksbaron 2007, 124–126

（10）Rijksbaron も『イオン』後半部でのヘルメーネウスをもちいる文脈の違いに言及している：「そして、もちろん、この対話篇の二番目の部分全体は、イオンが実際には何も知らないことを証明する働きがある。」（Rijksbaron 2007, 128）

（11）Capuccino は『プロタゴラス』347e1–7を挙げて、プラトンによれば、書かれた文字である詩を理解すること、つまりホメロスが本当に言いたいことを理解することは不可能であると指摘する（Capuccino 2011, 69, n.16）。しかし、本稿の理解では、このテキスト一は実際の可能性ではなく、ソクラテスの規範的な要求を述べている。書かれた文字は反論ができない以上、作者が本当に言わんとするところを突き止めることが不可能であるにしても、吟誦詩人の仕事が価値を持つためには、ホメロスの趣旨の理解が必

要であることが示唆されている。そして、『イオン』後半部では『プロタゴラス』とは異なる仕方で、イオンがそれをなしえないことが述べられている。

(12) 中澤 2001, 4–7

(13) 中澤 2001, 11–14。この点は Woolf が重視する点でもある（Woolf 1997, 192–195）。

(14) このテキスト三と後に続く、画家、彫刻家、吟誦詩人の列挙の箇所から、詩人の技術、また、吟誦詩人の技術の存在について議論がある。Janaway は詩人と吟誦詩人の技術をプラトンは認めたと考え、それらの美しさが技術ではなく霊感によってもたらされるものとした（Janaway 1992, 2、また 22）。この解釈は詩人や吟誦詩人を肯定的に評価する余地を残している。Stern-Gillet は対照的に詩人や吟誦詩人の技術を認めず、テキスト三をこれらの技術が認められている証拠とすることに反対している（Stern-Gillet 2004, 185）。本稿は Stern-Gillet に賛成する。全体に関わるという特徴は、技術一般が持つ特性である。もし、詩作の技術があるとするならば、それは全体に関わり、そして、イオンがそれを所有するならば、全ての詩人達について語ることができる。イオンが結果として他の詩人達について語ることができないのならば、吟誦詩人の技術が存在しようと、しなかろうと、いずれにしても、イオンは技術を持ってはいない。Stern-Gillet の言うように、仮設による議論として考えるならば、吟誦の技術の存在を積極的に肯定する必要はない。

(15) 「分け前」と訳したモイラ（μοῖρα）は古代ギリシア宗教、また運命観にも関係する非常に重要な語となる。A Greek Lexicon によれば、この語は「部分」（part）や「割り当て」（share）、そして、人間の生の割り当て、すなわち、「運命」（destiny）を意味する。さらに、人間の運命や、死を定める運命の女神をも意味する。（Liddell, H. G. and Scott, R. 1996. *A Greek-English Lexicon*. Revised and augmented throughout by Sir Henry Stuart Jones with the assistance of Roderick McKenzie. Oxford: Clarendon Press.）。ここでの「モイラ」の含意は、割り当ての意味を強くとって訳した。同様の訳としては、例えば、Miller は “by divine dispensation” と訳している（Miller 1981, 10）。他方で、より積極的な意味を示唆しうるものとしては、森の「たまたま神のめぐみとしてあたえられたもの」（森 1975, 130）や Canto の “une faveur divine” というものがある（Canto 2001, 102, 150）。本稿ではモイラという語は後の 536c1-2 の箇所で、詩人達が特定のジャンルの詩にのみ巧みであって、他のものに関してはそうではないという能力の限定性にも関連して使われることから、中立的な訳語を選択した。

(16) Woolf は『イオン』篇には自己概念についての理論が表れていると言う（Woolf 1997, 189）。彼によれば、『イオン』と『メノン』の両対話篇を通じて、知識のみが人に自己であること、あるいは、行為の作用者（agent）としての身分を与えることになる。Woolf の議論において、とくに伝達者としての詩人と吟誦詩人の評価は重要になる。テキスト六では、神のみが伝達される美しい詩の真の語り手であり、詩人や吟誦詩人は語りの主体にはなりえない、いわば腹話術の人形である。Woolf は作用者における能動／受動の峻別を重視する（ibid., 194）。医者という技術者は、その技術に関わる規則を自分の管理下に置き、能動的に規則を用いている。他方、詩人と吟誦詩人は受動的に神から割り当てられた霊感を受け、伝えている。イオンもその時には「我を忘れた状態」（535b7-c1）にある（ibid., 196）。Woolf の議論はプラトンの自己概念理解に重要な視座を与えている。だが、この立論を評価するためには、プラトンの著作の中で、自己が常に「行為の作用者」として規定されうるか綿密に検討する必要がある。詩人や吟誦詩人が奪われているのは、詩を語るという特定の行為における作用者としての身分である。自己は、実際に行われている行為の中にのみ、見いだされているのだろうか。

(17) 『イオン』篇で詩人が語りの主体の身分を剥奪されることが中心の論点に置かれている一方で、『国家』第十巻では「模倣」（ミーメーシス）を行うものとして批判をなされているという違いがあるように見える。ただし、『国家』第十巻のミーメーシス論に対して、プラトンの芸術論一般を読み込む議論を、荻野が厳しく批判している（荻野 1989, 5）。荻野の論点で重要なのは、「模倣」という概念を用いた『国家』の議論でも、問題視されているのは詩人が用いる「言語」であるということだ（荻野 1989, 5, 15-17）。荻野によれば、古典時代のギリシア人ならば、例えば「正義」といった人間の価値に関わる語の意味を、ホメロスの詩に代表されるフィクションによって習得するだろう（荻野 1989, 15）。フィクションは様々な徳を直示的に表し、語の意味を流通させ、使用者がそれについて理解している気にさせる。結果として、ソクラテスが絶えず要求した、正義や徳といった事柄についての「何か？」という根本的な問をフィクションは遮断してしまう（ibid., 17）。『イオン』でも問題となるのは、詩人と吟誦詩人が言葉を通じて伝達を行う際に、語られていることに対しての理解と主体性がないことであり、また、聴衆をも巻き込んだ狂気の伝達構造全体であった。言語に対する態度を詩人批判の焦点とする荻野の理解は、『イオン』と『国家』を貫く問題の把握を可能にする。

(18) Murray 1997, 130 を参照。

(19) 訳文は岩波書店『プラトン全集』第一巻中の松永雄二訳より引用した。

(20) Gonzalez は『イオン』と『パイドロス』に見られる、狂気・神がかりに関する異なる評価の理由を、哲学者と詩人が持つ狂気の違いによって説明する。Gonzalez は哲学者も詩人もともに狂気を持ちうると考えている。ただし、哲学者の狂気は思考や理性的能力を欠いていない点で詩人の狂気とは異なる（Gonzalez 2011, 103）。

(21) Gonzalez も同様の解釈をしている：「哲学者は、神の受動的な代弁者になってしまい、そしてそれゆえに彼自身と、彼の理性を失う危険に抵抗しながら、神的霊感を受けいれなければならない。」（Gonzalez 2011, 105）。このことは本稿で示したように、『ソクラテスの弁明』や『パイドン』といった他の対話篇にも見られる態度である。

(22) 本稿の作成と同時期に、学習院大学の小島和男氏、田代嶺氏と『イオン』テキスト翻訳の検討を行い、多大なるご教示を受けた。御礼申し上げる。もちろん、本稿における、訳の誤りについての責任は全て筆者にある。